

学校感染症一覧表



「学校感染症」とは、学校保健安全法第19条で定められている感染症で、り患した幼児・児童・生徒は、必要な期間登校を見合わせるように定められています。出席停止期間は、十分な休養を取り、早期に回復させるためとともに、他の幼児・児童・生徒への感染を防ぐためのものです。医師より診断を受けた場合は、速やかに学校まで御連絡ください。なお、お休みは“出席停止”となり、欠席扱いにはなりません。出席停止期間を終え、医師より登校の許可が出た際は、「**学校感染症による登校許可届**」（ほけんのしおりまたはホームページからダウンロード）に必要事項を御記入の上、学校まで御提出ください。

第1種 学校感染症 “治癒するまで出席停止”

エボラ出血熱、クリミア・コンゴ出血熱、痘そう、南米出血熱、ペスト、マールブルグ病、ラッサ熱、急性灰白髄炎、ジフテリア、重症急性呼吸器症候群及び鳥インフルエンザ、**新型コロナウイルス感染症**

第2種 学校感染症 “飛沫する感染症で、学校において流行を広げる可能性が高いもの”

感染症	出席停止期間	主な症状	潜伏期間
インフルエンザ (鳥インフルエンザ(H5N1)を除く)	発症した後5日(発症した日はO日)を経過し、かつ、解熱した後、2日(幼児は3日)を経過するまで	発熱・頭痛・全身倦怠感・鼻づまり・くしゃみ・たんなど	1～4日
百日咳	特有の咳が消失するまで、又は5日間の適正な抗菌性物質製剤による治療が終了するまで	はじめは風邪と変わらないが、1週間位から咳こみが激しくなり、咳きこんだ後にヒューと音をたて吸い込むようになる。	1～2週間
麻疹 (はしか)	発しんに伴う発熱が解熱した後、丸3日経過するまで	発熱・せき・鼻水・目やになどの風邪症状の後、頬の内側に白い斑点(コップリック斑)ができる。発熱後、4日目より皮膚に発疹ができる。	10～12日
流行性耳下腺炎 (おたふくかぜ)	耳下腺・顎下腺又は舌下腺の腫脹が発現した後、5日を経過し、かつ全身状態が良好になるまで	耳の下(耳下腺)がはれ、痛がる。左右とも腫れるが、片方だけの場合もあり、1週間前後でひく。熱が出ることもあるが、3～4日で落ち着く。	2～3週間
風しん (三日はしか)	発しんが消失するまで	初期は“麻疹(はしか)”に似たピンク色の発疹が顔・首・おなかに出はじめ、首の後ろやリンパ腺がはれる。のどや目が充血したりする。	2～3週間
水痘 (みずぼうそう)	全ての発しんがかさぶたになるまで	微熱と同時に全身に発疹ができる。赤い斑点中央に水ぶくれができる。2～3日がピークで、その後黒いかさぶたになる。	2～3週間
咽頭結膜熱 (プール熱)	発熱、咽頭炎、結膜炎が消退した後、丸2日を経過するまで	39℃前後の高熱が4・5日続き、のどの痛み・せき・目やにや目の充血がある。さらに頭痛・嘔気・下痢を伴うこともある。	1週間
結核	症状により医師において感染のおそれがないと認めるまで	初期は発熱やせき・たんが出るなど。症状がすすむと血痰や胸が痛くなり、体重が減ったりします。	人によって様々
髄膜炎菌性髄膜炎	症状により医師において感染のおそれがないと認めるまで	一過性の発熱または髄膜刺激症状	発症した場合、2～5日

第3種 学校感染症 “学校において流行を広げる可能性があるもの”

感染症	出席停止期間	主な症状	潜伏期間
流行性角結膜炎 (はやり目)	医師において感染のおそれがないと認めるまで	白目が赤く充血するが、目やには少なく、涙が出たりする。	1週間前後
急性出血性結膜炎 (アポ口病)	医師において感染のおそれがないと認めるまで	両眼に激しい異物感と痛みがあり、まぶたのはれ、充血とともに眼球結膜に大小の出血を起こす。	24～36時間
腸管出血性大腸菌 感染症	医師において感染のおそれがないと認めるまで	最初は軽い腹痛と下痢があり、何日かすると激しい下痢、血便が出る。	4～8日
コレラ	治癒するまで	突然の激しい水溶性の下痢と嘔吐で発症し、脱水症状を起こす。	数時間～3日
細菌性赤痢		発熱・腹痛・下痢・嘔吐などの症状が急激に現れる。	1～5日
腸チフス パラチフス		持続する発熱・除脈・発疹(バラ疹)・脾腫など。	1～2週間

その他の感染症 “医師の判断によっては出席停止の必要のあるもの”

感染症	出席停止期間	主な症状	潜伏期間
溶連菌感染症	感染のおそれなくなったことを医師に確認してから	のどの痛み、38～39℃の高熱・嘔吐・腹痛・頭痛など。体や手足に発疹ができ、舌はイチゴのようにぶつぶつになる。	2～5日
手足口病	医師の判断によって登校することができる	初期は指・手のひら・足の裏・唇や頬の内側・舌等に白い水疱状の発疹ができる。	2～7日
感染性胃腸炎	医師の判断による	ウイルスにより違いはありますが、おもな症状は嘔気・嘔吐・下痢・腹痛・発熱などです。	ウイルスにより異なる
マイコプラズマ肺炎		発熱や頭痛を伴った気分不快が3～4日続く。最初は乾いた咳で痰も少量で、次第に咳がだんだんひどくなり、発熱や他の症状が消えてもしばらく咳が続く。	2～3週間
伝染性軟属腫 (水いぼ)		脇の下・脇腹・股の付け根等に1～2mmの皮膚と同じ色のぶつぶつができ、しばらくすると3～4mm位まで大きくなる。真ん中にへこみがあり、どんどん増える。	
伝染性膿痂疹 (とびひ)		透明の水疱ができ、それが白く濁る。水疱は破れやすくかゆみもあるため、かきむしることでうつる。	

※その他の感染症で、学校活動において流行を広げる可能性がある感染症は、医師の判断で出席停止となるものがあります。診断を受けた時点で医師の指示を仰いでください。